

生活科・総合的な学習の時間における カリキュラム・マネジメントを問い直す —主体的・対話的で深い学びを実現するために何が必要か—

谷本寛文

I 課題の所在と研究の目的

本研究は、生活科及び総合的な学習の時間における課題を明らかにし、その課題を克服するための具体を示すことを目的としている。その際、「主体的・対話的で深い学び」を実現するためには何が必要か、という観点からカリキュラム・マネジメントに焦点をあて、その課題解決に向けた具体的な取組について提示する。

生活科は1989（平成元）年の学習指導要領改訂において教育課程に位置付けられ、総合的な学習の時間は1998（平成10）年、1999（平成11）年の学習指導要領改訂において小学校・中学校及び高等学校の教育課程に位置付けられた。

以来、改訂を重ね、2017（平成29）年告示、小学校学習指導要領に示されている生活科の目標、総合的な学習の時間の目標及び中学校学習指導要領に示されている総合的な学習の時間の目標は以下のとおりである。

【小学校・生活科】

具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関り等に気付くとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。
- (2) 身近な人々、社会及び自然を自分との関りで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようにする。
- (3) 身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり生活を豊かにした

りしようとする態度を養う。

【小学校・総合的な学習の時間】

探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを旨とする。

- (1) 探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解するようにする。
- (2) 実社会や実生活の中から問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分類して、まとめ・表現することができるようにする。
- (3) 探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。

【中学校・総合的な学習の時間】

探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを旨とする。

- (1) 探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解するようにする。
- (2) 実社会や実生活の中から問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分類して、まとめ・表現することができるようにする。
- (3) 探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。

これまで、生活科及び総合的な学習の時間において、具体的な活動や体験を通して生きる力の育成を目指し

た取り組みが実践されてきたが、「活動あって学びなし」という指摘が繰り返され、いまだ多くの学校現場で経年課題となっている。この課題は、活発で積極的な学習活動が展開される授業でさえ例外ではない。

「活動や体験における学びの価値を学習者が実感し、学びを汎用的な資質・能力の拡充につなげる」ということが今日的課題であると考え。この課題を解決する視点として重要なことは、教科の枠を超えた横断的・総合的なカリキュラム・マネジメントの視点をもつことである。それは、単に単元と単元、教科と教科を関係付けるという狭い意味ではなく、生きる力として共通する資質・能力という観点から俯瞰して捉えなければならぬ。

Ⅱ 生活科・総合的な学習の時間に関する カリキュラムマネジメントを問い直す

小学校学習指導要領 2017（平成 29）年告示には解説生活編及び総合的な学習の時間編第 1 章総説に各学校におけるカリキュラム・マネジメントの推進について、以下のような観点が示されている。

- ◎教科等の目標や内容を見通し、特に学習の基盤となる資質・能力の育成
- ◎現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力の育成
- ◎教科等横断的な学習を充実
- ◎「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善
- ◎学校全体として、児童生徒や学校、地域の実態を適切に把握し、教育内容や時間の配分、必要な人的・物的体制の確保、教育課程の実施状況に基づく改善などを通して、教育活動の質を向上させ、学習の効果の最大化を図るカリキュラム・マネジメントに努めること

これらの視点を基に多くの学校現場では、カリキュラム・マップ等の作成に取り組んでいる。各教科等の年間指導計画を一覧表にまとめ単元ごとの関連を工夫して表現されたものをよく目にする。このような細かいカリキュラム・マップ等を作成するためには多くの時間と労力が費やされたことだろうと推測する。

このようなカリキュラム・マップ等を作成する取組は、各教科等の関連を捉え意識化する、という意味で

重要なことであると考え、改めて以下のような視点で問い直す必要がある。

1. 作成したカリキュラム・マップ等の一覧表は、日常的に活用できるものになっているか。
2. 作成したカリキュラム・マップ等の一覧表は、具体的な授業改善に生かされているか。

仮に、多くの時間と労力を費やして作成したカリキュラム・マップ等の一覧表が、日常的な授業づくりを生かすことができていないとするならば、改善していく必要があるのではないだろうか。教科等の枠を超えて育成すべき資質・能力からカリキュラム・マネジメントの目的を改めて捉え直したい。

1 シンプルでダイナミックな評価

前述したカリキュラム・マップ等の一覧表の多くは、各教科等の単元の目標を示し、それらの関係性を表現しているものであるが、求められる資質・能力の育成のために示されている「主体的・対話的で深い学び」「思考力・判断力・表現力の育成」という視点を軸に各教科等のカリキュラムをマネジメントし、評価することが重要であると考え。「主体的・対話的で深い学び」「思考力・判断力・表現力の育成」の実現は、教科等の枠を超えた資質・能力を育成する上で極めて重要なことであり、指導者はその具体と価値を明らかにし、説明することができなければならない。

2 主体的・対話的で深い学びの実現

「主体的」とは、児童生徒自ら、ということであり、積極的にという言葉に置き換えることができる。児童生徒が主体的な学びを実現するために必要なものは何か。それは、興味関心と自ら解決したいと感じる必然性のある疑問や問いである。

「対話的」については、その価値を明確にする必要がある。意見交流を通して自分では気づかなかったことに気づいたり、自分にはなかった視点からの意見に気づいたりすることで自己のものの方・考え方を拡充することに対話的な学びの価値がある。つまり、児童生徒が多角的なものの方・考え方の価値を実感することが重要なのである。

「深い学び」の具体は、児童生徒による新たな発見、「なるほど」という実感である。そのためには、ある疑問や問いが簡単に解決されるのではなく、さらなる

問いが生まれなければならない。児童生徒の思考を揺さぶる教師の発問が重要となる。新たな問いが生まれることが探究へとつながっていくのである。

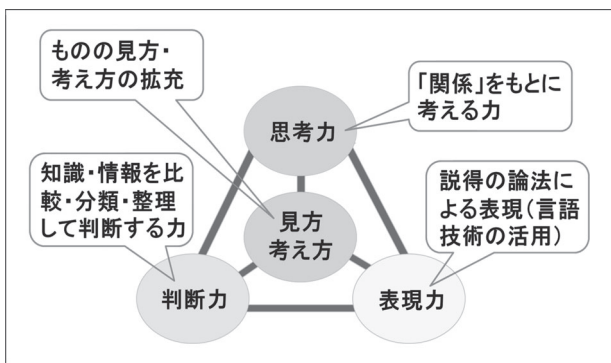
3 思考力・判断力・表現力の育成

「思考力」とは、考える力である。しかし、ただ考えるという捉えではなく、ものとものごとの関係を考えるということが重要である。

「判断力」とは、より良い判断をする力である。そのために必要なことは、知識・情報・経験であり、それらを総合的に比較・分類・整理しより良い判断ができる力を育成する必要がある。より良い判断をするために、知識・情報・経験が必要であるというものの見方・考え方が重要なのである。

「表現力」の育成において重要なことは、表現者に表現したいこと、つまり伝えたいことがある、ということである。伝えたいことが明確になっていることがより分かりやすい表現の工夫をしようとするエネルギーを生む。逆を言えば、伝えたいことが無ければ表現の工夫をする必然性が生まれないということである。

ここまで示してきた具体や価値を評価規準に置き換えることで、教科等の枠を超える共通的な視点をもつことができ、日々の授業における指導と評価の一体化を実現することができる。つまり、シンプルでダイナミックな評価は、ものごとの本質に迫ったものであり、日常的、汎用的に活用することができるものであると考える。下に思考力、判断力、表現力の関係を図示する。



Ⅲ カリキュラム・マネジメントの視点から見た授業実践

ここでは、生活科が担う役割と今日的課題を提示した上で、光華小学校で実践された生活科の授業を取り上げてカリキュラム・マネジメントの具体について述べる。

1 生活科の教科目標と今日的課題

生活科での学びを通して育成すべき資質・能力を明らかにし、具体的な活動や体験を展開しなければならないことは言うまでもない。

2017（平成29）年告示小学校学習指導要領に示されている生活科の教科目標を改めて見てみたい。

具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらに関わり等に気付くとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。
- (2) 身近な人々、社会及び自然を自分との関りで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようにする。
- (3) 身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり生活を豊かにしたりしようとする態度を養う。

(1) は、「知識及び技能の基礎」(2) は、「思考力、判断力、表現力等の基礎」(3) は、「学びに向かう力、人間性等」に対応しており、具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、児童が自ら自立し、生活を豊かにすることが、生活科の教科目標の構成である。

また、「主体的・対話的で深い学び」を児童が学ぶ過程の中核にある働きとして捉えることの重要性が示され、カリキュラム・マネジメントの意識を高めることが今日的課題として取り上げられている。

2 光華小学校のカリキュラム・マネジメント

(1) 京都光華女子学園 光華小学校

京都光華女子学園は、真宗大谷派（東本願寺）前門首夫人の故大谷智子裏方（昭和天皇妃 香淳皇后の妹君）が、「仏教精神に基づく女子教育」を発願し、昭和十四年に設立された学園である。同じ敷地内に幼稚園、小学校、中学校、高等学校、大学・大学院・短期大学部があり、大学・短期大学部が幼小中高等学校との教育的連携を深めている総合学園である。

「おもいやりの心をもち、未来に羽ばたく子どもを育てる」光華小学校は、環境教育にも力を入れており、これまでに京都環境賞を受賞するなど、先進的な取組を展開している。また、新型コロナウイルス感染症拡大により二月末に政府が決定した全国一斉休校の中、「児童の学びを止めない」という思いでいち早くオンライン授業を開始し、複数のニュース番組に取り上げられた。

今回、紹介する授業実践は、光華小学校重田庸子教諭による単元名「光華秋祭り」岩本淳平教諭による「生き物はかせに なるう」の二つの授業実践である。ともにカリキュラム・マネジメントの視点から授業者の工夫と児童の具体的な反応に焦点を当てて紹介する。

(2) 重田庸子教諭の授業実践

(ア) 単元名「光華秋まつり」

本単元は、生活科の全体成の内、次の内容と関連する単元構成となっている。

自分自身の生活や成長に関する内容	身近な人々、社会及び自然と関わる活動に関する内容		
・自分自身の生活や成長を振り返る活動を行う	・身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動を行う	・身近な自然を観察したり、季節や地域の行事に関わったりするなどの活動を行う	学習対象・学習活動等
・自分のことや支えてくれた人々について考える	・遊びや遊びに使う物を工夫して作る	・それらの違いや特徴を見付ける	思考力、判断力、表現力等の基礎

・自分が大きくなったこと、自分でできるようになったこと、役割が増えたことなどが分かる	・その面白さや自然の不思議さに気付く	・自然の様子や四季の変化、季節によって生活の様子が変わること気付く	知識及び技能の基礎
・これまでの生活や成長を支えてくれた人々に感謝の気持ちをもち、これからのせいちょうへの願いをもって、意欲的に生活しようとする	・みんなと楽しみながら遊びを創り出そうとする	・それらを取り入れ自分の生活を楽しくしようとする	学びに向かう力、人間性等

(イ) 単元構想の特色

- ・収穫の喜びや感謝を表現する秋祭りを児童の発想で行う。
- ・光華幼稚園の園児を招待して、園児に楽しんでもらえる秋祭りの内容を児童が工夫する。
- ・六年生の協力を得て最高学年と秋祭りを盛り上げる。
- ・成長している自分を振り返る。

(ウ) 児童とともに立てる単元学習計画

重田教諭は、児童に「秋祭りはどのような祭りなのか」問いかけ、収穫の喜びと感謝を表現するものであることを捉えたうえで、児童が生活科で経験してきた野菜作りや育てた野菜の収穫についてつなげている。また、秋祭りを計画する際、「どのような秋祭りにしたいのか」ということを問いかけ、児童に相談させる場を設定することで、次のような反応が生まれた。

「祭りだから、たくさんの人に来てもらいたい。」
 「光華幼稚園の子を呼びたい。」
 「お家の人にも来てもらいたい。」
 「おみこしを作りたい。」

「みんなが楽しめるいろいろな屋台があるといいな。」

「六年生にお願いして一緒にお祭りをしたい。」等

重田教諭は、単元学習計画を立てる段階で児童の「こんなことがしてみたい」という主体的な思いを基に、そのためには何が必要か考えさせることで、児童に課

題解決力を育成している。

(工) 思考力、判断力、表現力を磨く重田教諭の問いかけ

重田教諭の児童への問いかけの特徴は、次のようなものである。

「どうしたい?」「何がしたい?」「そのためには、どうすればよいと思う?」「どうして?」「なぜ?」「気付いたことは?」等

このような問いかけによって、重田教諭は児童の思考力、判断力、表現力を汎用的に磨いている。

(オ) 光華幼稚園のみんなに楽しんでもらうために

教室では、光華幼稚園のみんなに楽しんでもらうためには、二年生として何をするのか具体的な会議が開かれた。この会議を通して次のような具体的な行動目標が立てられた。

「ニコニコの顔で声をかける。」「優しく手をつなぐ。」「トイレの声掛けをしてあげる。」「走らない。」「

「園児さんに合わせる。」「全部の屋台へ行けるようにカードを作ってシールを貼ってあげる。」「

「何がしたいか優しく聞いてあげる。」「

重田教諭は、児童が就学前に経験していることを基にスタートカリキュラムを意識して児童に話をさせている。児童が園児の立場に立って何をしてあげればよいのかについて考えることは、相手のことを考え、思いやりをもって行動する心を育むうえで、重要なことである。

(カ) 「やってよかった」という実感を子ども達に

六年生の協力により開かれた光華秋祭りは、次のような内容である。

- ・二年生が段ボールで作成したおみこしは、収穫した野菜を折り紙で作った飾りや秋の木の実、色づいた葉などで見事に飾られている。
- ・まずは、二年生が園児をエスコートし、園児と一緒におみこしかつぎを楽しむ。
- ・次に、身の回りの物で作ったゲーム等の屋台へ園児を招待する。

【まとあて】【くじ引き】【ボール入れ】【魚釣り】【モグラたたき】【スマートボール】【ダンスコーナー】

相手が喜んでくれることが自分の喜びになる経験は、児童に限らず大切なことである。光華秋祭りを企画し、やってよかったという児童の実感が単元の振り返り活動の場で共有された。重田教諭は、児童の秋祭

りへの思いや行動目標を基に振り返りの場を設定し、児童の達成感や向上心を拡充し、汎用的な価値づけを児童に自覚化させた。

(キ) 重田教諭が大切にしていること

《重田教諭へのインタビュー》

谷本：重田先生が生活科の授業で大切にされていることを聞かせてください。

重田：大切にしていることをキーワードで挙げますと、「好奇心」「見つける」「気付く」「感じる」「見通す」「試す」「かかわる」「工夫する」「達成感」「振り返る」「向上心」「おもいやり」「感謝」です。

谷本：カリキュラム・マネジメントの重要性について、どのような考えをおもちですか。

重田：「児童が学びや体験・経験を活かし、つなぐ」ということが重要であると考えています。単に単元と単元をつなぐというのではなく、児童が「学びをつなぐ」ということを大切にしたいと思います。また、光華女園では、光華女子大学の学生さんが食育・健康教育や環境教育をしてくださいますし、光華高校の生徒さんが読み聞かせに来てくださいます。小学生は、光華幼稚園へ読み聞かせに行かせてもらっています。幼稚園から大学までが隣接していること、幅広い「つながり」の場があることに日々感謝しています。

重田先生へのインタビューを通して感じることは、具体的な活動や体験を通して、児童に汎用的な資質・能力、ものの見方・考え方を育成されているということである。

加えて、重田先生が子どもたちに問いかけられると、二年生や幼稚園の園児は重田先生の問いに引き込まれ重田先生の明るい笑顔につられて笑顔の輪が広がる様子に驚かされる。

(3) 岩本淳平教諭の授業実践

(ア) 単元名「生き物はかせに なるう」

本単元は、生活科で育成すべき資質・能力とともに、国語科及び図工との関連を図った単元構成となっている。

自分自身の生活や成長に関する内容	身近な人々、社会及び自然と関わる活動に関する内容	
・自分自身の生活や成長を振り返る活動を行う	・動物を飼ったり植物を育てたりする活動を行う	学習対象・学習活動等
・自分のことや支えてくれた人々について考える	・それらの育つ場所、変化や成長の様子に感心をもって働きかける	思考力、判断力、表現力等の基礎
・自分が大きくなったこと、自分でできるようになったこと、役割が増えたことなどが分かる	・それらは生命をもっていることや成長していることに気付く	知識及び技能の基礎
・これまでの生活や成長を支えてくれた人々に感謝の気持ちを持ち、これからのせいちょうへの願いをもって、意欲的に生活しようとする	・生き物への親しみをもち、大切にしようとする。	学びに向かう力、人間性等

(イ) ザリガニを飼うことになった子ども達は

岩本教諭は、本単元の導入において学校の校庭やビヨトープ、公園などへ行き、どんな場所にどんな生き物がいるかを見つめたり、観察したり、といった活動を設定した。児童にとって、「見つめる」という活動は、ワクワク感があり、夢中になれる活動である。発見・観察のポイントは、どんな場所にどんな生き物がいるのか、それは、「なぜそこにいるのか」という問いに繋がっている。

観察経験をもとに、子ども達はザリガニを飼うことになった。光華小学校では、一人一匹のザリガニを飼育する。児童が、自分のザリガニという親しみをもち、責任感を持って接するとともに生命の尊さを実感してほしいという思いからである。

ザリガニを飼うことになった子ども達は、次のような話合いを展開した。

【ザリガニを飼うために知りたいことは】

- ・どんなものを食べるのかな？
- ・どんな住かにすればよいのかな？
- ・水槽の水はどのくらい入れるとよいのかな？
- ・水槽に入れる水は水道の水でもよいのかな？

一人一匹のザリガニを育てるということは、子ども達に責任感を生み、「自分ごと」として疑問を解決す

るための調べ学習へと発展していった。様々な方法により子ども達は次の内容を明らかにした。

【子ども達による課題解決】

- ・水草や小魚、魚の卵など、なんでも食べる。
 - ・陸地を作る。(陸地ができるくらいの水の量)
 - ・砂利や小石を入れてあげる。脱皮をするから。
 - ・えさの食べ残しで水が汚れないようにする。
 - ・ザリガニは五年くらい生きることができる。
- 等

飼育を始めた子ども達は、自分のザリガニに名前を付け、疑問と発見を繰り返し、課題解決力を高めていく。

(ウ) ある日突然

一匹のザリガニが死んでしまった。毎日愛情をもってお世話していた児童は、大きなショックを受け、どうすればよいのか分からない状態であった。

このような場合、児童へどのような声をかけるだろうか。

「どうして死んだのかな。新しいザリガニを用意、してあげるから元気を出してね。」という対応の仕方があるかもしれない。岩下教諭が児童へ投げかけた言葉は次のようなものである。

〇〇さんの悲しい気持ち、よく分かるよ。先生は、〇〇さんが毎日ザリガニさんの気持ちになって一生懸命お世話をしていたことを知っているよ。ザリガニさんのお墓をみんなで作ってあげようか。

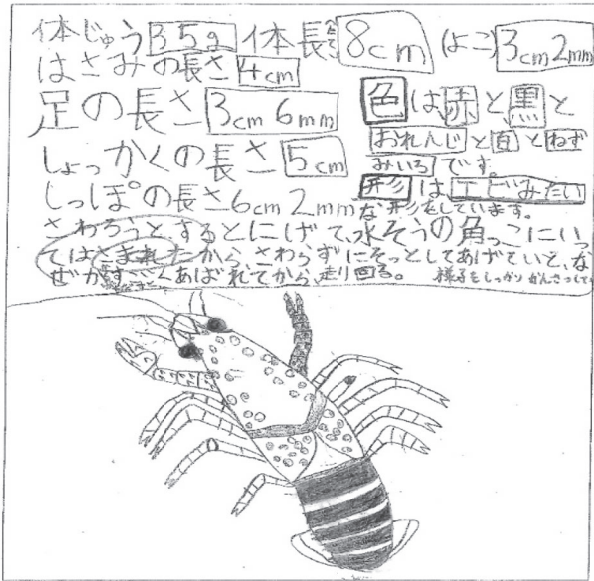
クラスで育てているザリガニさんを育ててくれるかな。

岩下教諭は、死んでしまうザリガニがでた場合を想定し、クラス全員で飼育する数匹のザリガニを用意していた。死んだからといって安易に新しいザリガニを用意し、渡すのではなく、他の児童にも死ということについて考える場をあたえ、さらに命あるものに対する向き合い方を考えさせた。

(エ) ザリガニの身体測定

岩下教諭は、ザリガニが変化し、成長していることに気づき、生命を持っていることやその大切さを児童に感じて欲しいという願いから児童と相談し、ザリガニの身体測定という活動を設定した。

自分のザリガニに心を寄せ、愛着を持って接している児童は、実に細かく丁寧な記録をとっている。

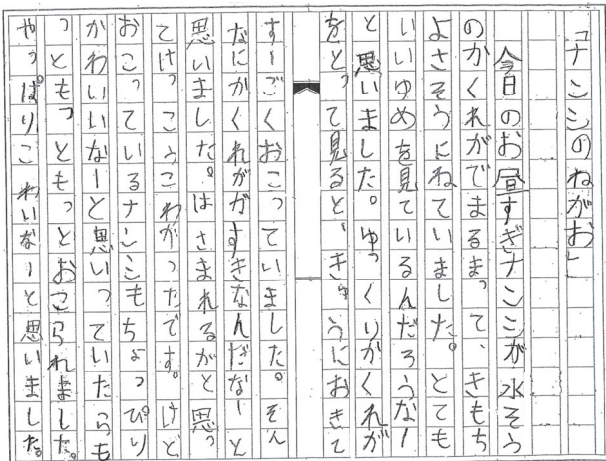


- ・「ナンシ」という名前から自分のザリガニに対する愛着
- ・ザリガニの立場に立った思い
- ・怖いけどかわいい、でも、ちょっと怖いという心の揺れ

(オ) 児童の作文が変わる

作文指導で最も重要なことは、「書きたいことがあるか」ということである。気付いたり、発見したりしたことを「伝えたい、表現したい」という思いがなければ、表現の工夫を考えると必然は生まれない。

次に紹介する作文は、児童とザリガニの関係が想像できる、実にほのほのとした作文である。



作文指導で最も重要なことは、「書きたいことがあるか」ということである。気付いたり、発見したりしたことを「伝えたい、表現したい」という思いがなければ、表現の工夫を考えると必然は生まれない。

細かく観察し、気付くこと、発見すること、感じることは、表現のエネルギ―そのものなのである。

ここに紹介する児童の作文から次のような児童の思いを想像することができる。

(カ) 岩下教諭のカリキュラム・マネジメント

岩下教諭は、生活科と図工を関連付けた版画の単元を構想し、実践した。



これは、生活科でザリガニを飼育している二年生が作成した紙版画である。紙版画は、パーツごとに紙を切り、それをつなぎ合わせて刷るものである。

ザリガニを注意深く観察したことのない大人が作成したらどのような作品になるだろうか。

大人は、子どもに「細かく観察しなさい」とよく言うが、重要なことは細かく観察する動機づけなのである。愛着をもって日々細かく観察しているからこそ、これほどまでに細かい特徴を表現できるのであろう。

(キ) 岩本教諭へのインタビュー

岩本教諭は、教育学部で美術を専門に学び、公立小学校教諭を経て光華小学校で活躍されている。岩本教諭の作品観を尋ねると、次のような言葉が返ってきた。

「作品そのものだけでなく、作品過程に感動します。子ども達の『ひらめいた』『分かった』という言葉が大好きです。」

美術に決められたルールはないのです、と語る岩本

教諭の見方・考え方は、教科の枠を超えて児童の創造的思考力、判断力、表現力を育成するものである。

4 授業実践を通して

生活科に限らず、「主体的・対話的で深い学び」の実現には次の要素が必要である。

- ①児童の知的好奇心を揺さぶる疑問や問い
- ②意見交流を通して多角的なものの見方・考え方についてその価値を実感すること
- ③新たな発見による「なるほど」という感動と実感

これら学びの三要素とともに重要なことは、教師が児童に与える影響である。

今回、重田教諭と岩本教諭の授業実践を紹介して改めて思うことは、自立に向けた成長過程にある児童にとって、豊かな感性をもち、知的好奇心と向上心をもった「学び続ける教師」の影響は大きく、極めて重要な教育条件だということである。また、生きる力として今の学びが何に繋がっていくのか、どう繋げていくのか、という視点から指導・評価するプロセス評価の重要性と、生きる力としての資質・能力から捉えるカリキュラム・マネジメントの重要性を改めて感じる。

5 結語

今回、生活科及び総合的な学習の時間における課題を明らかにし、その課題を克服するための具体を教科横断的なカリキュラム・マネジメントの視点から小学校生活科における授業実践を取り上げて提示した。

「主体的・対話的で深い学び」を実現するためには、何が必要かということを具体的に捉え、汎用的な資質・能力の育成という観点から単元と単元の関係、教科と教科の関係を意識したカリキュラム・マネジメントが必要である。

現代社会は、まさに「これまで経験したことのない問題を解決する力、予測困難な問題を解決する力」が求められる社会となっている。実生活で生きて働く力を児童生徒が磨き、拡充していくために生活科、総合的な学習の時間が果たす役割は大きい。児童生徒が学びの価値を実感し、こだわりをもって探究できるカリキュラム・マネジメントに取り組む必要がある。

今後、さらに総合的な学習の時間における実践的研究を中心に、学習者が探究の価値を自覚的に捉えるこ

とのできる指導方法について提示していきたい。

【参考文献】

- 1) 藤井千春編著『西洋教育思想』ミネルヴァ書房、2016年
- 2) 前田一男「近代教育史における改革原理としての「生活」の登場とその諸相」日本生活科・総合的学習教育学会編『せいかつか&そうごう』第18号、2011年
- 3) 吉富芳正・田村学著『新教科誕生の軌跡—生活科の形成過程に関する研究—』東洋館出版社、2014年
- 4) 田村知子・村川雅弘・吉富芳正・西岡加名恵編著『カリキュラムマネジメント・ハンドブック』ぎょうせい、2016年
- 5) 岩崎保之『目標準拠評価論の研究—学校教育における理論と実践—』ウエストン出版部、2009年
- 6) 北俊夫「総合的な学習と教科との関連の考え方」『総合的な学習と教科との相互関連』明治図書出版、2001年
- 7) 文部科学省『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説生活編』東洋館出版社、2018年
- 8) 文部科学省『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説総合的な学習の時間編』東洋館出版社、2018年